

# 半径4.7メートルの人間

奥野 宣之

## 撮

【第一回】

撮った写真をどう見るか

「あなたは撮ってばかりで、後で写真を見ないじゃないのよ!」

同じようなことを言われた人も多いのではないだろうか? これは、私が赤ん坊をお腹の上に登らせて遊んでいるとき、妻に向かって、

「せっかく君もデジカメ買ったんだから、もっと俺と子供とか撮ってよ!」

と言ったら、即座に返ってきたセリフだ。「なんでもいきなり怒るの?」と思

所で、連写モードで撮り続ける。数日後、画像をパソコンのモニターで確認し、データをハードディスクにコピー。次に、画像が入ったメモリーカードを嫁さんに、「はい、これ、写真入ってるから」と渡す。彼女は、パソコンを開いて、良く撮れている数十枚を選び出し、ネット上のプリント屋さんに発注。数日後、写真が届く。嫁は時系列になるよう写真をアルバムに入れていく。

私は、まだ髪の毛も生えていない子の我が子の写真をじっくり見て、聞く。「一枚あたりいくら? ……へえ、安いね!」

冒頭のセリフは、この撮影後の態度に対する指摘だったのだ。撮ってそのままじゃあ、写真

好きとは言えない。これは、多くの写真ファンにとって、なかなか響く言葉じゃないでしょうか。

「新製品のカメラがすごい!」  
「構図が、シャッターチャンすが!」なんてことばかり言うてないで、ちゃんと撮った写真を見ろ、原点到帰れ、と。

「王様は裸だ!」というのにも似ていて、本質的なことを言われちゃったなあ、一本取られたなあ、という気がした。

ところで、男というのは、間違いない「ため込む」性質を持っているなあと、思う。原始時代の村。食べ物があるとすぐ宴会を開いて倉庫を空つ

きからだ。たとえば、写真を撮ったとき、ポストイットやメモ帳に、次のように、被写体、絞り、シャッター速度、天候、口ケーションなどをメモしておく。

① 銅像 / f 2.8 / 60分の1  
／ 晴れ / 大阪城公園  
② 自転車 / f 5.6 / 8分の1  
／ 大阪駅ターミナル  
③ 人々 / f 4 / 500分の1  
／ 駅前の踏切

さて、撮った後の話に戻ろう。私は、写真を念入りに選んで、日ごろからメモ帳や手帳代わりに使っているA5(A4の2分の1、単行本サイズ)の大学ノートに貼っていくことにした。

なぜ、アルバムではなく大学ノートを使うかというと、余白にメモを貼ったり、書き込みがで

プリントが上がってきたら、写真を事務用テープ糊でノートに貼り、ついでに、このメモも同じページに貼っておく。

4分割、8分割などの「割り付けプリント」も便利。

これが一カ所にそろっていると、得られる情報の量はすごいですよ。

デジタル写真はコンビニでプリントするが、自宅では、「ポラロイドTWO」という携帯用プリンター内蔵デジカメでプリントしている。これを使うと、写真が名刺サイズのシールとして出てくるから、その場ですぐノートに貼り付けて、写真日記をつけることができる。

デジタル写真は「すこいだろ?」と使いた方が説明したとき、父が言った言葉が忘れられない。「これ、印刷するときはどうするの?」

いくらモニターが進化しようとしても、人間の目は進化しないのだなあ。写真にきちんと付き合つたために、テクノロジはあまり役に立たないのではないかと。

そんなわけで、最近の私のテーマは「原点到帰」だ。やみくもに撮るのをやめて、きちんと考えてシャッターを切る。撮つ

デジタル写真は「すこいだろ?」と使いた方が説明したとき、父が言った言葉が忘れられない。「これ、印刷するときはどうするの?」

そんなわけで、最近の私のテーマは「原点到帰」だ。やみくもに撮るのをやめて、きちんと考えてシャッターを切る。撮つ

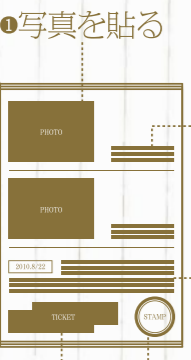
デジタル写真は「すこいだろ?」と使いた方が説明したとき、父が言った言葉が忘れられない。「これ、印刷するときはどうするの?」

そんなわけで、最近の私のテーマは「原点到帰」だ。やみくもに撮るのをやめて、きちんと考えてシャッターを切る。撮つ

デジタル写真は「すこいだろ?」と使いた方が説明したとき、父が言った言葉が忘れられない。「これ、印刷するときはどうするの?」

街を歩いている人がモデルのように写る。ライカの人物描写はすごいですね。

いろいろあってA5の大学ノートになった



① 写真を貼る

② 撮影メモは必ず

③ 日記を書いて写真の「まわり」を記録する

④ 「紙くず」類も保存しておく



プリントが上がってきたら、写真を事務用テープ糊でノートに貼り、ついでに、このメモも同じページに貼っておく。



4分割、8分割などの「割り付けプリント」も便利。



これが一カ所にそろっていると、得られる情報の量はすごいですよ。



奥野 宣之

作家。1981年大阪府生まれ。同志社大学文学部を卒業後、出版社および新聞社への勤務を経て、独自の情報整理術を書いた『情報は1冊のノートにまとめなさい』(ナナ・コーポレート・コミュニケーション)でデビュー。同書は32万部のベストセラーに。若手ビジネスマンを中心に支持を集め、これまでの累計部数は50万部を超える。最新作は『仕事の成果が激変する 知的生産ワークアウト』(ダイヤモンド社)。